

2014 年度 小委員会活動成果報告

(2015 年 2 月 24 日作成)

小委員会名	建築企画小委員会	主 査 名：木多 彩子 就任年月：2013 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	建築社会システム本委員会	委員長名：石坂 公一 主 査 名：
設 置 期 間	2013 年 4 月 ～ 2015 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>・本小委員会は、先駆的な建築企画実践例を広く扱い、見学・研究会や調査研究活動を通して実践例の記録と評価を行い、独自に運営する HP などのメディアで成果を発信することに加え、これまで手薄であった研究面の充実を図り、研究論文の発表などを通して、学問的な側面からも社会的価値を重視した建築活動を牽引する一助となることを目的とする。</p> <p>初年度(2013 年度)：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成熟化社会に対応する「社会的価値創造を果たしながら、経営的合理性も独自の手法で獲得している社会的建築企画」というテーマを前小委員会から引継ぎ、獲得している研究費を活用して各種調査や研究会開催などの研究活動を進める。 ・昨年度までの活動成果である小委員会独自の HP の質を継続的に高める。 <p>2 年度 (2014 年度)：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初年度までの研究成果をとりまとめ、学会等での研究発表を通じて広く成果報告を行うとともに議論を深める。 ・活動成果を踏まえた内容で次年度学会大会等でのシンポジウム開催を目指し、準備を進める。 	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：無	
	主査：木多彩子 (摂南大学) 幹事：上田正人 (阪急コンストラクション・マネジメント) 飯田匡 (大阪大学) 田中直人 (鳥取大学) 江本達也 (大鉄工業) 柏原士郎 (大阪大学・武庫川女子大学名誉教授) 中村洋平 (竹中工務店) 高田光雄 (京都大学大学院) 高井宏之 (名城大学) 所 千夏 (アトリエ CK) 萩原正五郎 (元大林組) 林弥寿子 (関西電力) 阪田弘一 (京都工芸繊維大学) 生川慶一郎 (京都市住宅供給公社)	
設置 WG (WG 名：目的)	ビルディングエコノミックス WG： 小委員会の活動の中で、特に、現在のストック活用社会に注目し、ストック活用社会における企画から運営に至る一連の建築活動を円滑に行うための基礎資料の作成を目的とする。	
2014 年度予算	70,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.aij.or.jp/keizai/kikaku/index.html

項 目	自 己 評 価
委員会開催数	1 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	1. 「あべのハルカス見学会ー巨大再開発施設と建築企画」 2014 年 11 月 19 日 14:00~17:00 参加者数 19 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パ ブリックコメント等	

<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>1. 達成度50%程度 2. 活動計画に則って、小委員会の見学会を他団体(計画行政学会関西支部)との共催で行った。 3. 活動計画に則って、研究活動資金(科学研究費)をもとに調査研究活動(事前不確定性を前提とした動的な建築企画実務プロセスの体系化)を展開し、その成果の一部を建築学会大会(近畿)で発表した。 8029 木多彩子、飯田匡、辻井麻衣子「IBA エムシャーパーク事業後のルール地域における都市再生に関する調査報告ー建築・都市における新しい価値の付加と価値の転換手法に関する研究ー」2014年度日本建築学会大会学術講演梗概集</p>
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<p>1. ビルディングエコノミックスWGは、主査の諸般の都合により来年度以降に活動を先送りすることとなった。 2. 活動成果を踏まえた内容で大会等でのシンポジウム開催を目指し、準備を進めることは、主査ならびに幹事の本務が多忙を極め、達成できなかった。 3. 本小委員会は今年度で廃止し、2015年度からは新たに「建築企画研究小委員会」として活動を継続展開する。 4. 2013年度に新設したHPの積極的な活用と近年の活動成果を踏まえたシンポジウム開催が、計画案だけで留まっており、後続の「建築企画研究小委員会」への課題と考えられる。</p>

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

*表中の「(書名)」等の赤文字は、記述を誘導するための説明である。記載の有無にかかわらず最終的には削除のうえ提出すること。